



# かなであん

249-0002

逗子市山の根1-7-24

Tel : 046-871-1863 Fax : 046-872-3485

いづくへか 帰る日近き  
こちして この世の  
ものの なつかしきころ  
与謝野晶子

先日北海道から羽田への便で、滅多にないことに、よく話す男性と隣になり、着陸までの一時間ほど話が続き、着陸間際に「何をされているのか」と聞かれ「僧侶」だというと、ずっと隣でスマホで映画を観ていた連れの女性が、「宗教は道德じゃないですものね。今の日本には哲学が必要だと思います」と口を開きました。彼が「この人はビジネスパートナーで聖心の哲学科出身なんですよ」と教えてくれましたが、すぐ着陸してしまい、「もっと話かったね」と別れました。

今を象徴する若い女性起業家から哲学が必要だという言葉聞いて、何だか嬉しい一期一会でした。

\* \* \*

半世紀以上も前、京都の古本屋で西田幾多郎全集を、第1巻の「善の研究」を除いた全巻を「哲学を志すものは持っていなければ…」と買ったままですが、西洋哲学に東洋哲学を融合させ、親鸞にも大きな影響を受け仏教哲学に行き着き、「知の巨人」と世界的にも有名な西田哲学の「絶対矛盾的自己同一」には、仏教思想に基づいた「いのち」がこう捉えられています。

…生物。いきものと読む。  
「生」は草の生えている形を表したものだ。古代の中国人は、それで生物を表した。「いきもの」という大和言葉は、息をするものの意。これは英語の「アニマル（動物）」と同じ発想で、アニマルの「アニマ」はアニムス（空気、息、魂を意味するラテン語）から来ている。「いのち」という言葉においても、「い」は息。「ち」の方は、流動、循環する、力あるものを示す言葉。たとえば血、乳。東風、いかずち（雷）、おろち、という用例もある。息子にも息がついているが、発音は「むすこ」。「むす」は、実をむすぶ、苔むす、などのむすで、できてくるという意味である。これは「蒸す」に通じる。蒸し蒸しすれば、あっという間にカビが生えてしまうのが日本の温暖湿潤な気候であり、そんな大地から自然に生命が湧き出してくるのが虫。息子や娘もそれと同列なのだろう。

古代ギリシャ語には、生物を表す語が二つあった。ビオス（バイオテクノロジーなどの元になった言葉）とゾーエ「ズー（動物園）」などの形で英語に入っている）である。ビオスは個体としての生物。ゾーエはもう少し広くて、（個体を越えた）生命（いのち）という感じのものらしい。個体は必ず死ぬ。だが生命（ゾーエ）はずっと続き、

死にはしない。生物の個体は滅びるが、遺伝子は親から子に伝えられ、生命は世代交代しながら続いていく。必ず死ぬものと決して死なないもの、この絶対に矛盾している二つの性質を生物は合わせ持っている。だからわたしたちは「絶対矛盾的自己同一」なのである…。

\* \* \*

個人主義の現代社会は個体主義でもあります。それは必ず死ぬ命だからといって「死ぬ」ということしか考えない刹那主義を生みがちです。その虚しさに光と力を与えてくれるのが仏の智慧です。数かぎりないご先祖も、動植物も、そして自分も、すべてが永続性をもつ「いのち」だから尊いのだと気づかされません。

親鸞聖人は、「一切の有情はみなもて世々生々の父母兄弟なり」と味あわれました。有情とは、生きとし生きるものすべてです。縦社会、上下関係のなくなる世の中ですが、親鸞聖人が八百年の昔に、科学者シュバイツァーの如く、人類、生物はみな兄弟だとおっしゃった「いのち」の意味に気づかせていただきましょう。

この文章を打ち終えた次の日の新聞に西田幾多郎が取り上げられていました。今哲学の必要性に気づかれ出しているのかもしれない。合掌

## 奏庵法座

## 秋季彼岸会

日時

9月26日(水)

午前11時より

「真宗宗歌」

阿弥陀経

法話

講師 中垣昌美 師

大阪 善宗寺住職

元アメリカ開教使

龍谷大学名誉教授

## ご文章拝読

「恩徳讃」

～\*～

おとき

災害が相次いだ夏でしたが、お変わりなくお過ごしでしょうか。少しずつ秋めいて暑さも和らぎお彼岸を迎えます。

今月は中垣先生をお迎えます。臍臓癌のご本人曰く、「死ぬ前の元気が長い」と笑っておられました。先日のお電話では「いよいよ貴方達と今生のお別れ」と話されました。聞いておかなければならないことがいっぱいあるように思います。

どうぞお参り下さい。



## 永代経法要とは

去る19日、多くのお参りをいただき秋季永代経法要をお勤めいたしました。またご懇志やお供物をお送りいただきました皆さまには、紙面を借りて御礼申し上げます。

龍溪寺奏庵では、春秋のお彼岸に合わせて「永代経法要」をお勤めしています。

「永代経」はお経の種類ではなく、末長く(永代)お経が続き、真理が問われることを願った法要です。自分亡き後を案じることなく、お念仏のみ教えが伝えられお寺が存続していく願いが込められたご法事です。

こうした願いと志をもって永代経としてご懇志をお納めいただいた方、それに準ずるご懇志やお仏具、法衣などをお上げいただいた方々にご案内を差し上げお勤めしています。

永代経法要には、ご家族、兄弟姉妹、お孫さんもお参りされることも多く、亡くなられた人々と生かされている私たち、仏さまがより身近に、またそのおはたらきが自分に至り届いていることを素直に感じられる集いです。終活とか墓じまいなどの言葉に惑わされることない、揺るぎない安心とはどういうことなのかを、仏となって示して下さいなのです。

## 子の母を

おもふごとくにて

衆生仏を憶すれば

現前当来とほからず

如来を拝見うたがはず

北海道の自坊にいて今回の北海道胆振東部地震に遭い、直接の被害はなかったものの、東日本大震災当時の首都圏の重苦しさや暗さを思い出し、そのことを書いていたら、樹木希林が亡くなり、彼女について書きたくなった。■何故かという、樹木希林は、築地本願寺の仏前でジーンズ姿で結婚式を挙げており、それ以降、本願寺宗門立の千代田女子学園で学んだのが縁だと言う彼女の作品より、生き方や発言に仏教思想を感じて興味をもっていただけだ。■中でも破天荒な内田裕也との変則した夫婦関係を、「ぶつかり合うことで自分の中の汚れが浄化された」と表現していたのは、まさしく仏と私たちの関係そのものだ。問題児の夫は彼女の善知識だった。そして夫婦関係においてはお互い患者であり続けた。それは仏教徒の目指す姿だが、慇懃ではなく、強く意識もしていなかったらうところに、人々が面白く軽やかに感じられたのだろう。■人生を問われ、「絶望もしていないけど、別に輝いているとも思わない。それ自体なりに…、そのまんま…」と応え、レポーターが「自然体なんですね」と締めようとする、「私はそんな上等なもんじゃない」(わかってないのよねえ、でもいいか…)というような顔をしていた。■彼女の表現には仏教用語はなく、限定された宗旨もない。それゆえに普通の日本語で話す言葉とあの個性とが相まった力があつた。「死はいつでも来るもの。だから先の約束はしない。せいぜい一年以内。それまでずっと”死ぬ死ぬ詐欺”をやっている」と言っていた。私もそうだ。ロックンロール!

Norimaru